

第1回島根感染症研究会

日時：平成23年9月2日(金) 19:00~20:30
会場：ビッグハート出雲 2階「茶のスタジオ」
出雲市駅南町1-5 TEL:0853-20-2888
当番世話人：菊池 清 (島根県立中央病院副院長)

1. 薬剤耐性菌：当院における検出状況と対策
島根大学検査部・感染対策室・ICMT
森山 英彦

【特別講演】
「重症・難治性感染症の治療戦略
～カルバペネム系抗菌薬を中心に」
高根病院副院長 菅野 治重 先生

2. 日本紅斑熱の予後予測因子について
島根県立中央病院感染症科部長
中村 嗣

第2回島根感染症研究会

日時：平成24年6月22日(金) 19:00~21:00
会場：ビッグハート出雲 2階「茶のスタジオ」
出雲市駅南町1-5 TEL:0853-20-2888
当番世話人：磯部 威 (島根大学医学部内科学講座呼吸器・臨床腫瘍学教授)

1. 検体検査サーベイランス及び症候群サーベイランス
による感染症流行早期探知に関する基礎的研究
島根県立中央病院小児科¹
同 感染症科²
国立感染症研究所感染症情報センター³
現、川崎市立衛生研究所¹
菊池 清¹, 中村 嗣², 大日 康史³
菅原 民枝³, 岡部 信彦^{3,4}

インフルエンザ (Flu), RS ウイルス感染症などの流行を早期に探知し、地域の保健衛生及び医療活動に生かすために、検体検査サーベイランスと症候群サーベイランスの基礎的研究を行った。

【方法】[1] S病院において、Flu・RS・ロタ・アデノの各ウイルス迅速検査の日毎の実施数・陽性者数(検体検査サーベイランス)、症候群サーベイランスによる日毎の熱と咳がある外来患者数、定点報告による感染症発

生動向調査 (Flu, RS ウイルス感染症, 感染性胃腸炎) を比較した。[2] 2011年9月より、S病院を含む4病院(4医療圏)のFlu迅速検査数の日毎の変化を、各医療圏のFlu定点報告数と比較した。

【結果】[1] S病院のFluとRSウイルスの迅速検査陽性者数の変化は、感染症発生動向調査の結果によく一致した。感染性胃腸炎の定点報告は、ロタとアデノウイルスの流行だけでは説明できず、島根県ウイルス検出情報からノロウイルスによるものもあると推測した。熱と咳がある患者数の増加とFlu迅速検査実施数の増加はよく一致した。Flu迅速検査陰性者ばかりの時期にはRSウイルス感染症が流行していた。[2] 4病院の結果は翌日17時までには情報共有でき、受診患者数が多い病院ではFlu迅速検査陽性者数によるFlu地域流行の探知が可能であった。

【結論】いずれのサーベイランスも、感染症流行の探知

に役立つ可能性が示唆された。

2. PK-PD 理論に基づいた抗菌化学療法個別化への取り組み

島根大学医学部附属病院薬剤部¹

同 呼吸器・化学療法内科²

広島大学大学院医歯薬保健学研究院臨床薬物治療学³

西村 信弘¹, 石原 慎之¹, 直良 浩司¹

狩野 芙美², 磯部 威², 猪川 和朗³

森川 則文³

【目的】ラクタム系抗菌薬は、時間依存的に抗菌作用を示すことから、その臨床効果は薬物血中濃度が MIC を上回る時間の割合である time above MIC (%T>MIC) と相関することが報告されている。しかし、PK-PD 理論に基づいた個別的至適投与設計を臨床適用した報告は少ない。本研究では、肺炎患者を対象として meropenem (MEPM) および doripenem (DRPM) の至適投与設計をプロスペクティブに臨床応用し、その有用性および安全性を評価した。

【方法】対象は、当院呼吸器・化学療法内科に入院した成人院内肺炎患者のうち、MEPM および DRPM の投与が望ましいと医師が判断した患者および同意が得られた患者とし、MRSA 肺炎と診断された患者は除外した。抗菌化学療法のターゲット MIC を設定し、PK-PD ソフトウェアを用いて患者個々の PK パラメータから、モンテカルロ・シミュレーションにより %T>MIC および

その達成確立を算出した。推定した起因菌に対して %T>MIC が40%を超える投与方法を臨床適応し、臨床効果判定、細菌学的効果判定および副作用評価を行った。

【結果】対象は MEPM 12症例、DRPM 6 症例であり、平均投与日数はそれぞれ 8.5 ± 4.5 日、 6.8 ± 1.2 日であった。MEPM および DRPM 投与により全症例で臨床症状および臨床検査項目の改善が認められ有効と判定された。また、喀痰の微生物検査により、*Pseudomonas aeruginosa*, *Klebsiella pneumoniae*, *Escherichia coli* が検出され、いずれの症例においても菌の消失あるいは減少が観察された。MEPM 投与後、1 症例のみ AST, ALT の上昇を認めたもの一過性であり、その他臨床検査値の有意な変動は観察されず、概括安全度評価では全症例において安全性であると評価された。

【考察】以上の結果から、患者個々の推定 PK パラメータを用いて、ターゲット MIC を指標とした至適投与設計を臨床適応することにより、グラム陰性菌感染症の個別化治療が可能であることが示唆された。現在、他の抗菌薬についても PK-PD 理論に基づいた抗菌化学療法の適応を検討中である。

【特別講演】

「肺炎への挑戦ーガイドラインを含めた

新しい取り組みについてー」

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

感染免疫学講座教授 河野 茂 先生